



石神井南中学校 学校だより

平成29年度 第7号
発行日11月13日(月)
練馬区立石神井南中学校
校長 児島泰彦

1948年11月3日、日本人初のノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士の受賞が発表された日です。敗戦で自信をなくした日本人に再び勇気と自信を与えてくれました。それから約70年が過ぎ日本人の受賞者は先日のカズオ・イシグロ氏を含め、外国籍の人を合わせると26名になりました。しかし近年日本の科学の行く末を心配する学者が増えています。その理由の一つとして、物事を探究する能力の低下があるそうです。与えられた計算や書き取りの力は優れているが、何故そうなるのか、どうしてそのようになるのかといった探究する力が以前に比べると弱くなっているそうです。確かに私自身も何故という疑問を持つ機会が年とともに減ってきているように感じます。このままではいずれ日本人のノーベル賞受賞者は0になるのではないかととも言われています。我々教師はそういった学問の一翼を担っています。一翼を担うものとして考える力、読み解く力を育てるために日々努力、研鑽を積んでいきたいと思っています。

<道徳朝礼>

— こころの東京ルール —

東京都教育委員会は、「心の東京革命」教育推進の一環として、6月・11月・2月を「ふれあい月間（いじめ防止強化月間）」と定めています。本校でも毎年この時期に合わせてアンケートを行い、その結果から必要な生徒への面接やアンケートの内容に対応した組織的な指導を行っています。

実は12年前に、その「心の東京革命」推進委員会という東京都の組織に平成17年度の1年間、学校現場を離れ勤務していました。ここでの仕事は「あいさつ運動」として各地を訪れたり、中学生の主張東京都大会を開いて中学生の考えを広く発信したり、地域のふれあいや支え合いをテーマにした小学生の作品募集を行ったりと様々なことをしていました。その時に練馬区の小中学校にもお願いして、作品をたくさん提出してもらいました。

そもそも心の東京革命とは何かというと、親と大人が責任をもち、次代を担う子供の正義感や倫理観、思いやりの心を育み、自らが手本となりながら、人が生きていく上で当然の心得を伝えていこうという取組です。そして子供には、どのような社会にあっても守るべき基本的ルールがあること、社会の一員として役割と責任を果たしていくべきことを自らの行動を通して伝えることとしています。

そこで、具体的な呼びかけとして「こころの東京ルール～大人が子供の手本となろう～」を提唱しています。

- 毎日きちんとあいさつさせよう ○ 善いことは褒め、悪いことは叱ろう
- ねだる子供にがまんをさせよう ○ 先人や目上の人を敬う心を育てよう
- 体験の中で子供を鍛えよう

この内容を大人が子供に呼びかけることで社会の当たり前な基本的ルールを子供に伝えていく活動です。小さい子供には親が子供に対してきちんと教えなければいけませんが、中学生である皆さんはこの言葉を自分のために言い換えて考えることができると思います。

つまり、

- 日常的なあいさつの習慣 ○ 善悪の判断をきちんとすること
- わがまみを言わず思いやりの気持ちをもつこと
- 人を敬う心を大切にすること ○ 何事にも進んでチャレンジすること

この5つのことが自分に当てはめてできているか、今一度自分を振り返ってみてください。

修学旅行を終えて

3学年主任 岩見 卓

10月4日、東京駅を出発。チェックに遅れる班はあったものの、全員が無事に参加することができました。1日目は京都で乗り換え、広島まで新幹線で移動。途中、「これが中国山地か」「平和記念公園のある場所は三角洲になっている」など、これまでの各教科での学習内容と関連づけている生徒もいて、教員として喜びを感じました。広島の平和記念公園ではまず、平和記念資料館を見学しました。生々しい核兵器による被害を見て、生徒たちは皆、深い衝撃を受けた様子でした。そして、公園中央の死没者慰霊碑前で代表生徒による平和宣言を行い、全校生徒で作った千羽鶴を捧げました。そこからはボランティアガイドによる公園内の碑巡りをおこない、公園に隣接する宿舎に到着。宿舎では実際の被爆者の方の体験講話を聞かせていただきました。この様子を中国新聞社のジュニアライターの方が取材に来られ、その様子が10月19日付の中国新聞に大きく掲載されました。文化発表会でも展示会場に掲示しましたが、ご覧いただけでしょうか？

2日目は広島から京都に移動し、班別行動となりました。自分たちで見学地を決め、交通手段を調べ、計画を立てました。集合場所である嘉祥閣は烏丸丸太町の交差点から分かりにくいところにあったものの、無事全班が時間内に到着することができました。これまでの校外学習での経験が活かされた瞬間でした。「嘉祥閣」というのは能楽堂で、そこで狂言の鑑賞を行いました。伝統文化に触れる三年生の態度が大変素晴らしく、狂言師の方も時間以上に説明や演目を行ってくださいました。「型無し」と「型破り」の違いが、我々にとって大変勉強になりました。

3日目は宿舎から班別でのタクシー行動。なんとガイドを兼ねる運転手さんにジャンボタクシーで見学地を案内していただけるのです！ 班別行動中、我々教員はほとんど生徒と会うことができませんでした。集合場所に到着しての生徒たちの感想は一律に「とても楽しかった」「運転手さんが面白かった」というものでした。唯一天候に恵まれなかった事が残念でしたが、帰りの新幹線では生徒たちは修学旅行の終わりを惜しむかのように、東京まで楽しく過ごしていました。

今年度の修学旅行は初めて秋に行う日程となり、慣れない点も多く、特に帰ってから文化発表会までの時間が少なく、事後学習の時間が十分に確保できませんでした。そんな中で生徒たちはこれまでの石南中の三年生に負けない、立派な修学旅行ノートを作成させ、学習の成果を発表しました。きっと後輩たちにも大きな刺激となったはずです。平和への思い、日本の伝統文化の偉大さ、そしてかけがえのない仲間との思い出が、生徒たちの心に一生残ればいいなと思いました。





文化発表会を終えて

文化発表会担当 川瀬 裕子

舞台の部、海外派遣報告はオーストラリアでの学校やホームステイ生活について全編英語での報告でしたが、写真や動画を用いて誰もが楽しめる発表でした。合唱では3学年とも大変熱心に取り組み、当日は全力を尽くした合唱を聴かせてくれました。1年生は授業で発声を重視し、響きのある合唱を目指しました。2年生は「ヒカリ」で、環境・地球平和についての重い内容に取り組み、人々の心に響く合唱を目指しました。3年生は広島を含む修学旅行を終え「ヒロシマの有る国で」に心を込め、感動的な合唱をしました。

演劇部は「ラストチャンスは二度やってくる」で観客から大きな笑いを引き出し、また最後には「青春は一度だけ」と感動も与えてくれました。

吹奏楽部は各曲に趣向を凝らした振り付け、また何人もの素晴らしいソリストが立ち聴衆の心を掴みました。

展示の部では、どの学年の展示も授業や行事に一生懸命取り組んできた様子が分かり、皆よく

見学していました。特に、1年生は2年生の職場体験の報告、2年生は3年生の修学旅行の報告をよく見学しており、来年の自分たちの姿を重ね合わせていたようでした。美術科では3年作品「樹脂粘土による和菓子」がひととき人目を引いていました。

展示発表も舞台発表も生徒はみんな努力していました。そしてその裏には展示を担当した係がおり、また夏休み前から練習を重ねた指揮者、伴奏者がおり、ボランティアで裏方をした生徒、実行委員が駆け回っていたということも心にとめておいてくださると嬉しく思います。

